

携帯電話使用が脳腫瘍リスクに関連する証拠なし

研究は進行中ではあるものの、2010年5月17日付で公表されたWHOの知見を含め、利用可能な科学的証拠は、携帯電話が放射する、電磁界の一形態である無線周波数エネルギーによる健康リスク上昇を何ら示していないというのが、FDAの意見である。

FDAは、別個のものとして、携帯電話使用の劇的な増加にもかかわらず、脳腫瘍罹患率は1987年から2005年の間に上昇していないという米国国立がん研究所（NCI）の知見も引用する。

FDAは、携帯電話の規制に関する責任を米国連邦通信委員会（FCC）と分担している。携帯電話はFDAの許可または承認なしで販売できるが、FDAは健康に対する携帯電話の影響を監視している。携帯電話が使用者に傷害を与えるレベルでRFエネルギーを放射していることが分かった場合、FDAは対策をとる権限を有する。

最大規模の研究

2010年5月に公表された知見は、2000年に開始され、13カ国で実施された一連の研究であるINTERPHONE研究のものである（米国は加わっていない）。INTERPHONE研究は、WHOの国際がん研究機関がコーディネートした。

研究は、携帯電話長期使用者の大半について、脳腫瘍リスクがほぼ無い、または全く無いことを報告した。

「無線周波数エネルギーへの長期ばく露の影響に関しては、INTERPHONE研究によって完全に答えが得られたわけではなく、疑問はまだ残っている。しかし、この研究は、携帯電話使用の安全性評価において大きな価値をもつであろう情報を提供している。」とFDA医療機器・放射線保健センターの研究ネットワーク・リーダーAbiy Desta氏は言う。

WHOは、INTERPHONE研究はこれまでで最大規模の脳腫瘍と携帯電話使用の症例対照研究であり、RFエネルギーに少なくとも10年間ばく露した使用者の数は最大である。

研究は、携帯電話が放射するRFエネルギーを最も吸収する組織に見られる4種類の腫瘍：神経膠腫および髄膜腫として知られる脳の腫瘍、聴神経の腫瘍、耳下腺（唾液腺の中で最大）の腫瘍、に焦点が当てられた。研究目標は、携帯電話がこれらの腫瘍の発症リスクを上昇させるか否かを明らかにすることであった。

最近の知見

INTERPHONE研究の最近の知見は、*International Journal of Epidemiology* に2010年6月、オンライン投稿される予定であるが、携帯電話使用による脳腫瘍リスク上昇を示さなかった。いくつかのデータが携帯電話を最もたくさん使用した人についてのリスク上昇を示唆したものの、それから導かれる結論の強固はバイアスと誤差により限定的なものになることを研究の著者らは明らかにした。

WHOによれば、携帯電話使用はますます普及し、若い人にとって1日1時間以上の使用は珍しいことではない。しかし、このような使用増加は、最新機種の話からの放射は平均で低下していること、電話を頭部から離しておける携帯メールやハンズフリー操作の使用が増加していることなどにより和らげられている。

RFばく露の最小化

携帯電話長期使用者の大半について、脳腫瘍リスクがほぼ無い、または全く無いことが証拠により示されてはいても、自分のRFばく露低減を望む人に対して、次のことが可能であるとFDAは述べる。

- 携帯電話に費やす時間を低減する。
- 頭と携帯電話の距離を大きくするためにスピーカーモードまたはヘッドセットを使用する。

(完)